

公開講演会

第84回公開講演会 ―ガラスと古代日本―

1999年4月24日

◆肥塚隆保：分析化学から見た古代ガラス

古代ガラスに対する科学的研究の目的は、いつ、どこから伝来したのか？どのようにして作られ、日本ではいつ技術を獲得したのか？などを明らかにすることにある。

これまで、日本におけるガラス材質の歴史的変遷などを調べるため百数十遺跡の千数百点の試料を分析した結果、弥生後期と古墳後期頃には大きく材質に変化が見られた。なかでも、弥生の後期には中国系、西方系、インド系のガラスが出現した。色調の多彩なガラスはインド系のガラスにより、弥生後期に出現する赤茶色や黄緑色のガラスや、六世紀頃の黄色・黒色など、酸化アルミニウム含有量の多いソーダ石灰ガラスである。

弥生時代後期に出現するインド系ガラスは、中国東漢代に見られる仏教の影響などから、中国に伝わったインド系ガラスが日本に持ち込まれたと推定される。七世紀前後頃になって朝鮮半島系ガラスが出現した後、七世紀末頃になって日本で鉛ガラスの製造が始まったことなど、ガラス遺物の科学研究から当時における交流なども解明される。

◆川越俊一：考古学からみた7・8世紀のガラス生産

我国でのガラス製品は弥生時代に登場するが、国産ガラスの生産はより遅れて、奈良時代734(天平6)年に始まり、それが鉛ガラスであるとされてきた。ところが、近年の発掘資料の増加に伴い、国産ガラスの生産開始期がさらに遡ることが推定されるようになった。古代のガラス関連遺物である埴塙、小型鑄造鑄型の資料を整理することによって、国産ガラスの生産開始期やその技術的背景について検討を加え、以下の結論を得た。

国産鉛ガラスの生産は、飛鳥池遺跡出土のガラス埴塙、ガラスの原料である方鉛鉱・石英等の出土遺物の存在から、少なくとも天武朝まで遡ることが確認できること、ガラス埴塙で生産されたものは製品でなく、ガラス製品の素材である鉛ガラス板が主体であったこと、このよう

なガラス需要を引き起こした要因として、天武天皇による寺院整備があげられること、そして技術大系としては朝鮮半島の百済・新羅の影響下にあることなどである。

第85回公開講演会

1999年10月23日

◆小池伸彦：鑄造技術からみた富本銭

飛鳥池遺跡の出土遺物から、①鑄型の製作、②地金の調査、③鑄込み、④削り・磨き、という富本鑄銭作業の4大工程を想定し、その工房はさほど大規模なものではなかったとする見解を述べた。銅鑄の連鑄方法にみる技術的な伝統を背景として、枝銭に象徴される富本銭量産のための新たな鑄銭技術の導入は、比較的スムーズに図られた。国内の鉱産資源の開発は7世紀代にはかなりの程度進み、銅を始めとする地金の自給が可能であり、銭貨量産に向けての前提条件は整っていた。それは、所謂皇朝十二銭のような膨大な数を鑄造する本格的な大量生産ではないが、富本銭では原料供給から始まる銭貨量産のための一貫したシステムが創出され、一定程度機能していたといつてよい。その鑄造経験は和同開珎以降の本格的な量産のために、鑄銭技術の定着・改良を促進し、鑄銭技術とともに鑄銭工房や鑄銭組織のあり方についても、多くのノウハウを蓄積した、とする考えを述べた。

◆山下信一郎：平城京の市と銭

この講演では、日本古代において貨幣がもっとも頻繁に流通した、都城の市の様相を論じてみた。まず、発掘された平城京東西市の立地、市に取り付く運河(堀河)とその機能について、研究史を交えつつ概観した。次に、平城京における市の賑わいを探るため、平安京東西市の場合の店舗と商品の実態を見た後、平城京の市について、正倉院文書や木簡からわかる品目を中心に検討し、また、市場で労働する市人の活躍をかいま見た。さらに、市司の役人と職務、市における商法など、市の掟について整理を加え、市司による貨幣管理などについて言及し、長屋王家木簡・二条大路木簡にみる実際の物価事例を紹介してみた。最後に、市に出入りする人々を消費者、儲ける人、貧民、宗教者などの範疇に分類、また、雨乞いや刑罰執行の場など、市の儀礼空間としての性格についても論じた。